

「上代文学」ゼミ



学生の質問に答える多田教授(左) 千代田区で

研究編

二松学舎大

文学部国文学科

古典に学ぶ現代の問題

ぶらりし キャンパス

む。原発事故など今の世の中で起きている問題を考えるヒントをつかんでほしいとの思いから。

「日本霊異記」は奈良時代、薬師寺の僧侶景戒が、因果応報を主とした仏教の世界観を伝える百十六の説話をまとめたものだ。母親を殺そうとして地中に落ちる防人や、子どもにお金を返さなかったために来世で牛になる親の話など、奈良時代の庶民が登場する奇談を中心に構成されている。

「現代とは異なる生活をしてきた昔の人の考えを知ることが、立場の違う人や他国の思想など、異なる価値観を想像する契機になる」。千代田区の九段キャンパスにある文学部国文学科の多田一臣特別招聘教授(左)のゼミでは、日本最古の仏教説話集「日本霊異記」を二年かけて読み込

千葉大や東大などで教壇に立ち、東大の名誉教授でもある多田教授が今の二松学舎大へ招かれたのは二年前。ゼミの三、四年生計三十人は、高校時代から古典好きという学生もいるが、入学後に興味を持って入ってくる学生もいる。

原典は難解な漢文体。ゼミ生は多田教授自らが現代語訳した文章や書き下し文を参考に、好きな話を選んで感想や調べたことを発表する。三年生の升本由香さん(三)が「殺生や倫理観、差別の問題など現代人の感覚につながるルーツのようなものが分かる時があつて面白い」と言えば、同じく三年生の楠山愛さん(三)も「どこかで聞いたことのある

る昔話の原型のような説話を見つけた時は楽しい」と話し、古典に親しんでいる様子が伝わってくる。

東京電力福島第一原発事故では、多くの人が科学が絶対でないことに気付かされた。一方で文部科学省が国立大学の人文社会科学系の学部・大学院の組織見直しを検討するなど、実学重視の風潮もある中、多田教授は古典を読む意味、哲学も含めた人文学系の意義をこう強調する。「真に絶対かどうかを問い続け、世界を相対化して見るための道筋がたくさんあるのが人文学系の学問。これからも人文学、国文学が不可欠な学問であることは変わらな

(宮畑謙)